

# 文化

## 湖南冷徹なリアリズム

いまの国際社会を知る視座として

山田 伸吾



やまだ・しんご 1946年岐阜県生まれ。学校法人河合塾国語漢文資料・小論文科講師を経て、河合文化教育研究所研究員、内藤湖南研究会主宰、名古屋在住。

内藤湖南は慶応2(1886)年7月18日、旧南部藩鹿角郡毛馬内(現在の鹿角市十和田町毛馬内)で生まれた。本名は虎次郎、字は炳卿、湖南は号である。内藤家はもと甲斐国の出で、後に南部藩の重臣松庭家に仕えたという。代々儒を家学としており、父十津、祖父大壽はともに折衷学派の儒者であったといふ。

学校中等師範科に入學、その後編入試験を受けて高等師範科に転じ、20歳で卒業。北秋田郡綴子小学校訓導となるが、22歳で辞職し、父に無断で上京する。以後明教新誌「万報一覽」「大同新報」などの仏教系雑誌の記者となり、さらに「三河新聞」主筆、「日本人」「亜細亜」記者を

経て、「大阪朝日新聞」記者、「台湾日報」主筆、「萬朝報」論説記者を務め、再び「大阪朝日新聞」論説記者となる。1907(明治40)年10月に42歳で京都大学文科大講義師、翌々年に正式の教授となる。東洋史の講座を担当。支那近世史、清朝史、支那上古



京大の「学宝」ともいわれた内藤湖南

史、支那史学などを講じ、そのほとんどは後に学生の筆記に基づいて著作として刊行されることとなる。1934(昭和9)年6月、京都府相楽郡瓶原の禁山荘で胃がんのため亡くなる。

この経歴を見れば、湖南は人生の前半はジャーナリスト、後半は中国学者として活躍したと言えるが、その内実は一貫しており、ほぼ同じ思想性に支えられていた。新聞記者の時に発表した「近世支那史論」(1897年)は儒学を中心とした江戸思想史とも言うべきもので、研究論文としても通用する。京大教授の時には「支那論」(1914年)、「新支那論」(24年)など中国についての時事論を発表し、相変わらずジャーナリストとしての才覚を十二分に発揮している。

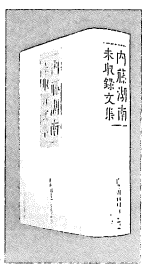
おそらく湖南の中では、ジャーナリストであることと学問研究者であることとは矛盾なくつなげていた。現実には

向かいながらその背後に歴史を透視し、歴史研究には現実的な課題を持って向き合っていたのだらう。

「内藤湖南未収録文集」を刊行した内藤湖南研究会は、河合文化教育研究所、学校法人河合塾の付属機関(内にある研究組織。東洋史学者で京都大学名誉教授の谷川雄氏(故人)を中心に、湖南の著作の読書会として1996年に発足した。

### 湖南の業績追い22年

の世界一アジア再生の思想」として刊行。同研究所の研究論集(第5集)に「特集 内藤湖南研究一学問・思想・人生」を発表した。近刊の「未収録文集」は、「内藤湖南未収録文集」



研究会「未収録文集」も刊行 藤湖南全集」の著作目録に載っている157編、研究会が新たに発見・収集した100編を加えた計327編を収録した、新聞・雑誌に発表した時事論や批評が中心で、湖南の時代認識や中国観が分かる。言論活動を3期に分け、時代状況照らし合わせながら詳細な解説を加えている。発行は河合文化教育研究所(☎052・730・1700)。2万7千円。

この姿勢を可能にしたのは、今風の表現なら「文献オタク」とも言える文献資料についての豊富な知識と、それらの文献に対する並外れた文章(漢文)読解力であった。湖南は、現実を見て歴史的文献を想起し、歴史的文献に現実との関係を読み取るといふ姿勢を貫き通したのである。

その好例が「支那論」である。「支那論」は辛亥革命(1911年)当時の混乱した中国社会を見据えながら書かれたものだが、この混乱の根源として「唐宋変革」から説き起している。「唐宋変革」論は後に概括的唐宋時代観(1902年)という論文となり、宋(960~1279)以降を中国の近世・近代とする湖南独自の時代区分を形作り、中国史研究における「京都学派」の基礎を築くこととなる。

湖南の中国「近世・近代」論は、応仁の乱(1467~77年)以降を日本の「近世・近代」と見なす発想と運動している。特徴的なことは、この「近世・近代」が辛亥革命以降の動きも包含していることである。おそらく戦後の「入民中国」をもその射程に収めていると思われる。湖南にとって明治維新以降の日本社会も、応仁の乱以降の歴史との連続性において理解すべきものであった。明治

こうした発想の背景には、中国が西洋社会に先駆けて「近代社会」をつくり上げ、世界史の中で最も先に進んだ、別の言葉でいえばもっとも成熟した社会であるという考え方があつた。ただ注意しなければならぬのは、湖南の

想定する「先進」社会とは、決して理想的な社会を意味しているわけではない。先進とは一面では人間の「善なるもの」が拡大することだが、もう一面では悪なるものもそれに伴って拡大する。湖南は捉えていた。

歴史家としての湖南の特徴は、まさしくこうした人間社会に対するリアリズムにあつた。湖南の特異なリアリズムに支えられた歴史観に立脚して、第2次世界大戦後に生まれたさまざまな理念、例えば社会主義・共産主義の理念、国際連合の理念、日本における「戦争放棄」の理念などが崩れ去ろうとしている今日の世界を眺めやうと、どうなるだろうか。

湖南の歴史観は、現在の国際社会を眺めていくための冷徹かつ有効な視座を提供してくれるはずだ。それだけに、湖南の歴史思想を現在に引きあえらるべきことは大きな意味があつて考えらる。このたびの「内藤湖南未収録文集」刊行が、その一助になるものと信じている。